

『仕事で悩む可愛い後輩が飲み会で泣き出して、俺が一晩だけ慰めてあげた結果ちんちんをたくさん慰めてもらった』

佐藤悠斗（28歳）は、営業部の中堅社員として真面目に働いていた。後輩思いで面倒見が良いと評判だった。

白峰みゆ（22歳）は入社2年目の後輩。黒髪ロングの可愛らしい童顔に、グラマラスなボディを持つ。

社内ではいつも明るく笑顔を絶やさず、後輩らしい元気な子として人気だった。

しかし最近、彼女の笑顔が少し無理をしているように見えることがあった。

ある金曜の夜、みゆから「先輩、ちょっと相談があるんですけど…飲みながらでもいいですか？」と誘われた。

二人は会社近くの落ち着いた居酒屋の個室に入った。

グラスを傾けながらみゆは本音を話し始めた。

「私……今担当してる新規プロジェクトで、大きなミスを連発してしまって…資料の数字を間違えてクライアントに提出してしまい、クレームが来て…上司に『君はまだ戦力になっていない。期待外れだ』って言われて……」

みゆの声が徐々に震え始めた。グラスを持つ手が小さく震え、目がうるうるとしてくる。

「普段はみんなの前で明るく振る舞ってるけど……本当は毎日朝起きた瞬間から胃が痛くて、

会社に行くのが怖くて……先輩にしか、こんな弱いところ見せられないんです…」

そこまで話したところで、みゆの目から大粒の涙がぽろっとこぼれ落ちた。

彼女は慌てて手の甲で拭ったが、涙は止まらず、肩が小さく震えていた。

「ごめんなさい…泣きそうになっちゃって…

社内ではいつも笑顔でいるのに、先輩の前でこんな情けない姿を見せたくなかったのに…」

悠斗は慌ててみゆの肩に手を置き、優しく声をかけた。

「大丈夫だよ。誰だって失敗するさ。俺も入社2年目の頃、似たようなミスで上司に散々怒鳴られて、トイレで泣いたことがあるよ。

みゆは真面目に頑張ってるじゃないか。俺がフォローするから、安心していい」

悠斗の温かい言葉に、みゆは少しだけ笑顔を見せたが、涙はまだ頬を伝っていた。

アルコールと感情の高ぶりで、みゆの頬は赤く染まっていた。

飲み会は2時間ほど続き、二人は店を出た。

夜風に当たりながら、みゆは悠斗の腕に寄りかかり、小さな声で言った。

「先輩……今夜だけ、みゆのこと、抱いてくれませんか？」

その言葉に悠斗は驚いたが、みゆの潤んだ瞳と熱い吐息を見て、静かに頷いた。

二人は近くのビジネスホテルにチェックインした。

部屋に入ると、みゆは悠斗の胸に顔を埋め、熱い吐息を漏らした。